

◆荒井良明 選

《新聞の投稿欄より》

よろよると生きるは同じ冬の蝶 白木静子  
年金の身を木枯しが吹き抜ける 神通芙美代  
霜柱踏みて職業安定所 中村東太  
前の席の編み方盗む冬帽子 松永京子

一句目「よろよると（矢島渚男選）」は、ペーススのあふれる滑稽句。「冬蝶の影よりわれの老いにけり（柴田白陽）」と方向性は同じで、自分の老いを冬の蝶に重ねて嘆いている「自虐ネタ」だが、それを客観的に見つめて笑い飛ばしている感もある。

第二句「年金の（矢島渚男選）」、第三句「霜柱（宇多喜代子選）」も、自虐の気分を含んで諧謔味を出している。

第四句目の「前の席の（正木ゆう子特選）」について、選者は「『盗む』に悪戯（いたづら）心が見える」と評している。

《「このはげ～」ではなく》

山眠る禿頭白眉腹八分 野尻徹治

元国会議員の誰かさんは、秘書に「このはげ～」と怒鳴ったが、人様に「はげ」などというのはよろしくない。だが、自分で自分のことを禿頭（とくとう＝はげあたま）というぶんには問題ない。

「禿頭」と「白眉＝白い眉毛」とあわせて自分が老人であることを示し、「山眠る」と取り合わせて、面白さを出している。ここでは「白眉」は「最もすぐれているもの」の意味ではなく、文字通りの意味で使っている。「山眠る禿頭白眉腹八分」と何度か呟けば、その滑稽さがわかるだろう。

《田所康雄（俳号・風天）の句》

冬めいてションベンの湯気はっきりと 風天

滑稽味あふれるこの句に接したとき、丹羽文雄のある俳句を思い出した。その俳句についての証言を引用する。証言者は、尾崎一雄の娘である。

「おれも一句出来たぞ」。父一雄と川辺を散策していた丹羽文雄さんがうれしそうに言われたそう。「春風やおれのしょんべん曲りけり」。

筆者も、「冬めいて」の掲句ができたときの様子を再現したい。

「やあねえ、お兄ちゃん、そんなところで」

「さくら、できたぞ。冬めいてションベンの湯気ほっかりと。どうだ、いい俳句だろう」

もうおわかりだろう。本名・田所康雄（俳号・風天）とは「男はつらいよ」シリーズで「フーテンの寅」を演じた俳優・渥美清その人である。ちょっと鼻にかかった渥美さんの声が聴こえてくるようだ。

赤とんぼじっとしたまま明日どうする 風天

「チョウチョかトンボのように好きなところへ出掛けて生涯を終われるなら、未は野たれ死んでもいいんじゃないんですかね」（渥美清の言葉 二〇〇七年放送 NHKアーカイブスより）。

「山頭火や放哉を演じてみたかった」というのが、俳優・渥美清の願いだった。その願いを果たさぬまま、彼は一九九六年八月四日、肺がんのため六十八歳の生涯を終えた。

#### 《一八六七年生まれの俳人の無季と滑稽句》

内のチョマが隣のタマを待つ夜かな 正岡子規

これは、子規の無季の句だ。「猫の恋」のことを言っているので「有季」と解釈する人もいる。確かに「恋」のことを言っているとすれば、季感は春だが、季語がなく、「恋」ではないかもしれないので、無季とした。この景はよくわかり、滑稽味も感じられる。

#### 《一九六九年生まれの俳人の無季と諧謔味》

次の句は、子規生誕からからおよそ百年後に生まれた俳人の句。

蠟製の Pasta 立ち昇りフォーク宙に凍つ 関悦史

「描写の対象と使い方が空前であるために初読では超現実性を帯び、最後まで読めば季語『凍つ』の寒々しさによって昭和の場末の哀感すら招かれ、諧謔

味が冴える」(橋本直、雑誌「俳句界」二〇一七年十月号)。「凍てる」「凍つ」は冬の季語だが、この場合はそう見えるだけで実際に凍っているわけではないので季語ではないとするのが正しいのではないか。

《一九九一年生まれの俳人の句》

春はすぐそこだけどパスワードが違う 福田若之

子規生誕からからおよそ百二十年後に生まれた俳人のこの句を見て、子規の句を思った。

鶏頭の十四五本もありぬべし 正岡子規

「春はすぐそこ」と「ありぬべし」は「確定」、「パスワードが違う」と「十四五本も」は「不確定」。

滑稽の種類の一つとして、「確定と不確定の乖離の生む滑稽」とでも言おうか。

(文中敬称略)